

令和6年度 第1回
西宮市文化まちづくり推進委員会会議録（要約）

日 時： 令和6年4月18日（木） 午前10時00分～午前11時45分
場 所： 西宮市役所東館7階 東701会議室
出席委員： 初田会長、北村副会長、石原委員、坂本委員、田中委員、野田委員、萩原委員、三瀬委員
欠席委員： なし
事務局： 長谷川産業文化局長、田中文化スポーツ部長、文化スポーツ課（石井担当課長、鳴坂係長、上念アドバイザー）、市民文化施設課（木村課長、水島係長）、（公財）文化振興財団（土居事業課長、田口係長）
傍聴者： 1名

（午前10時00分開会）

<議事内容>

（1）会長、副会長の選任

会長に初田委員、副会長に北村委員が選出された。

（2）アクションプラン（後期）について

事務局

- ・資料に基づき説明

<アクションプラン（後期）について>

（委員）

・後期に活かすため、コロナ禍にアーティストとつながってきた中で聞こえてきた声があれば補足を。

（事務局）

・色々な助成制度が立ち上がっていた時期でわかりにくい、整理してほしいなどの声があった。アーティストは発表機会が激減したのでYouTube等での発信の補助につなげた。

（事務局）

・文化振興財団ではアーティストの動画配信への助成や、実演芸術の再開を後押しする形で会場費や人件費を補助した。

・基本的には感謝の声が多数あった。不足する部分もあったかもしれないが、その中で生まれた新たな繋がりから財団のイベントに出演していただく例もあった。

(委員)

・アーティストの育成、施設や場の振興、市民とアーティストの橋渡しの3つの視点があるが、今回提起されているのは、市民とアーティストの橋渡し部分のみに見える。

(事務局)

・前期ではアーティスト育成や施設の振興など、それぞれをプランにあげていた。

・一つの項目がいろいろなことに波及することや、委員のご意見、市の計画策定の簡略化の方針などを踏まえ、後期では重点化した。

(委員)

・「体験」や「繋がり」の実施例の中でアーティスト育成や施設や場の振興、市民とアーティストとの橋渡しに関するものを入れてはどうか。一体のものかと思う。入り口の部分で少し整理を。

(事務局)

・アクションプラン後期では特に繋がり重点を置いた。人々をアートの沼にはめるほどの魅力的なクリエイションを見せる・聞かせる、支援していく場・機会を作るのが市や財団。

・コロナ後、まだ観客が戻っていないため、とにかく見る人・聞く人を戻し、市民がアートを好きになり、そのことで繋がることでアートへの愛着が継続していく。

(委員)

・与える側の芸術家について、市内の芸術家など、どういう人たちと市民に広めるのか、はっきりわかるとよい。

(事務局)

・現在も市内の芸術家とともに事業を実施しており、今後も基本的に市に関わる芸術家とともに進めたい。

(委員)

・後期の重点目標は、かなり思い切った若々しいフレーズと思うが、具体的にどういう方をターゲットとして想定しているのか。

(事務局)

・子どもから大人世代まで事業を展開しているが、後期では若い世代にアートに触れていただくことも意識してした。

・若い世代にどう働きかければ響くか、興味を持っていただけるか、インターンシップの学生の意見を取り入れたためそれを活かしていけることを考えたい。

(委員)

・漢字羅列のフレーズではなく、学生の言葉をイメージして繋げたことは良かった。

・若い世代は推しの分野に投資するが、推すためのプロセスとしてスマホで熱心にその分野を調べる。そこに情報がないと推しに繋がらない。SNSで情報を見て、さらにそこから繋がる形になれば。

(委員)

・繋いでいくことがすごく大事。例えば無料コンサートを見て、次に有料コンサートに行く。一足飛びには行かないがそこをどうつなぐか。

・今回、体験、つながりという一回限りにとどまらないという観点は素晴らしい。どう作るかは若い人からの意見、ターゲットへのマーケティングで道を作る。

・モチベーションのある人への情報提供や相談ができることのほかに、何かしらの布石があると目標に掲げる言葉に繋がる。

(委員)

・アートの沼にはまるために、気づきのプロセスがあれば。このアートはどういうものか、創作の考え方やストーリーを教えてもらえる機会とセットになっていれば、参加した人がプロセスの中で気づき、自分の中で受け止め、沼にはまる、ということではないか。

・気づきを促すことを体験のプログラムに入れることができれば。

(委員)

・集客のための広報だけでなく、次のプロジェクトにつなげることを公演前から考える機会が増えた。対面・リアルなものだけでなく、動画やSNSなどで本番後からも定期的に発信することも事業として捉えたらよいのでは。

・子どものときからどの段階で体験できる機会を作れるかを描いていけるとよい。

(事務局)

・文化振興財団では、ミ・ベモル(22名のサクソによるアンサンブルのプロ楽団、財団と包括連携協定)と不登校の支援プログラムを実施。硬くなっていた心が緩んで涙が出てきたとの感想があった。アミティタイムでも顔が見える形で紹介し、推しに繋がる仕組みも考えている。

・文化芸術にあまり興味のない人にも、商業施設で見かけて鑑賞していただいたり、イベントに当日参加してもらったり、きっかけを作ることはアクションプラン後期を考える際に

意識した。

- ・プロアーティストの力を伝えていける仕組みを、入口を増やすことで考えたい。

(委員)

- ・子どもたちは心が柔らかく、アウトリーチなどの授業を受けると、いろいろなことに興味を持ったりアーティストに話しかけたりする場面が見られ、すごく大事なことだと思う。
- ・スモールステップかもしれないが、身近な場所にあるアート作品への気づきや、同じ人の作品が他のところでも見たなどの広がりも大切で、あまり経費をかけなくてもできる。

(委員)

- ・芸術文化センターでは中学1年生にわくわくオーケストラを実施している。
- ・今回、「つながり」を掲げているが、どうしても見るだけになりがちで、それを横につなげるためにどう展開するのが難しい。実施例の中でワークショップなどもあったので、参考にしたい。

(委員)

- ・好きになるためには身近に感じないと難しい。文化芸術というワードだけでも遠ざかってしまう人もいる。次につながるような情報の提示や、見るだけでなく参加してみる、関わっているという状況があると身近に感じる。そういった工夫や、気持ちのある方へのもう一押しがあればよい。

<評価について>

(委員)

- ・市民アンケートはすぐに成果が出るものではないが、5年後の目標を共有するだけでも数値を意識できる。
- ・市民アンケートについて、動画やオンラインによる文化芸術も含めてはどうか。また、その芸能を誰かに勧めたいかという項目があってもよいのでは。

(委員)

- ・可能であれば、モニター調査により経年でその人がどう変わるのか検証し、質的な評価をすることも検討を。

(委員)

- ・その人がどうはまっていったのか、また、今までなかった推しができた、このテーマでつながったのかということは、アンケートでは難しい。質的調査としてモニターの方の意識や行動の変容を計ればよいと思う。

<自由意見>

(委員)

- ・キャッチフレーズはよいが、「沼」や「推し」の意味が分からない方が相当数おられる。ステートメントで解説することは必要では。
- ・企業のSDGsやESGを考慮した地域連携の動きと、文化芸術への貢献・支援を繋げていけるかが課題。それがアーティストへの支援になるので、もう少し意識しても良い。

(事務局)

- ・ステートメント的なものの必要性も検討したが、どう市民に訴えかけ自分ごととしてとらえていただくかを考え今の形になった。
- ・後期の5年間で企業やアーティストの方と広げていけるような事業の成果を検証する。

(委員)

- ・趣味は個人の好みでアート好きな人は最初から好き。押し付けでアートを紹介するのはどうかと思う。
- ・コンサートを聞いて心が開いて活動的になれる、心が豊かになる、ひいては平和に繋がったり生活の豊かさに繋がったりすることが目標だと思うが、漠然としていて何を目標にしたいのか今一つ理解できていない。
- ・例えばもう少し、小学校の子供たちに芸術に触れさせて心豊かにするとか、何か絞れるといいと思う。目標の1文だけだと、好きな人は好きでいいじゃないという感じがして、趣味を人に押し付けるのはどうなのかなという気もする。

(事務局)

- ・文化芸術だけではなくスポーツや生涯学習など、いろいろな入口を設けてなるべく多くの人が、生きがいなどを見つけられるよう取り組んでいる。
- ・趣味縁という言葉もあり、リーチしていくためには今回はもう一步踏み込み、少しアプローチを強めたキャッチフレーズになっている。
- ・コロナ禍で引っ込みがちになっていたのも、少し推してみることで充実した生活やQOLを高めることに繋がったり、ウェルビーイングにもつなげたい。

(委員)

- ・アクションプラン（後期）は市内の文化芸術関係の方も見るので、担い手になるアーティストへの視点が感じられるものでないと、自分の方は見ていない、市民ばかり見ているという印象を与えてしまう。
- ・しかし、全部は繋がっているのも、市民を支援することは西宮にゆかりのあるアーティストへの支援や施設への支援にもなる。
- ・全体を見た上でこの重点目標にしていることが伝わるように補足して、表に見せていくことも大事だと思うので、ぜひそこは取り組んでいただきたい。

(事務局)

・アーティスト目線ということについて、他者とのつながりは何と何かを加える必要性を感じた。市としては今まで高度経済成長の中であれば市主体でイベントを打つこともできたが、特に西宮では地元のアーティストの方の協力をいただきながら開催できることが文教住宅都市としての特徴と思うので、そうしたことが感じられるようなアクションプランにしなければならない。

・西宮市は文化振興事業を市の直営と文化振興財団を通して実施している。そういう意味では市や財団がどのような事業を実施しているのかをお示しできればアクションプランに基づいた取組への理解を深めることにつながったと思う。次回以降の委員会の審議でもそういった情報提供ができればより深まると思う。

(会長)

・アクションプラン後期の目標は行政的な感じがせず、柔らかくユニークな提案になっており色々なご意見いただければと思っていた。あいまいな部分があったかと思うので明瞭化をする必要があるとのご意見があった。その中で、具体的に進めていくアイデアも生まれたように思う。

・気づきを促していく方法として、一度実施したことが次につながる、深まる情報発信の方法などを今後具体的に進めていく必要性が指摘されたかと思う。

・芸術を身近に感じられることは子どもたちの学びにも通じるし、一般市民の身近なところに芸術があることをよりみんなが分かってく、そういう当たり前のことからつながりが生まれていくというご意見もあった。

・評価についても、前期はどうだったかというご指摘から今一度振り返りながら、それを踏まえたうえで後期に入るが、モニターのようなもののアイデアや、いろいろな方法について、やっていく中で一やりっぱなしは意味がないので、できるだけ有効な方法で評価していく、合わせてやっていくと充実していく。

・押し付けはよくないという意見もあったが、文化は優しさが大事だと思う。自分に優しい、自分が芸術を通して癒される、そして人にも優しい、人と自分が芸術を通して繋がって優しくなっていく、そしてさらには世界にも優しいというような持続可能な方向性にも向かっていける価値を持った芸術の在り方でありたいと思う。西宮の文化芸術がこれを機会にさらにいっそういい感じに一すごく頑張っているいろいろなことに取り組むよりも深くじんわりと充実することが大事だと思う。

(午前 11 時 45 分閉会)